北の町の悪魔

2020/02/29
msd｜Bliss
https://mors-et-benefica.com/bliss

美は死をも打ち負かさねばならないのだ。

――ハインリヒ・マン

三浦淳訳「奇蹟」より

登場人物

クラウド

金持ちの商人

鍛冶屋の亭主

鍛冶屋の見習い

詩人

ワンピースの少女

鍛冶屋の女房

黒マントの男

セフィロス

第一幕

第一場

殺風景な店内。上手にカウンターがひとつ。上には、ペン立てや書類やメモ用紙、電話や置き時計などがごたごたと並んでいる。舞台中央にテーブルとイスが二脚。下手にドア。店にやってくる者はすべてこのドアから出入りし、テーブルのあたりで立ちどまって対話に入る。ドアの外にバイクのフェンリルがとめてある。ＡＣかＡＣＣの世界とのつながりを連想させるように。

クラウド、カウンターの奥で椅子に座り、帳簿らしきものを物憂く繰っている。倦怠がにじむ。

金持ちの商人、入ってくる。羽振りのよさを感じさせる、派手な、どこか品のない緑色の上着を着ている。

金持ちの商人
　こんにちは。
クラウド
（低く愛想なしに、客に顔を向けもせずに）どうも。
金持ちの商人
　お仕事は順調ですか。
クラウド
　まあ。
金持ちの商人
　今日はお願いがあって来たんです。あなたに運んでいただきたいものがあって。
クラウド
（興味を示さないで、まだ客に視線もやらない）
金持ちの商人
（傍白、いまいましそうに舌打ちして）お高くとまった野郎め！
（すぐに愛想のいい顔に戻って、甘い声で）ねえ、どうか聞いてくださいよ、ご機嫌

をなおして、ね？　そうつんけんされちゃ、悲しくなってしまう。この町の人間はみんなして、あなたのご機嫌をとろうと必死なんだから。こんな物騒で、不安定な世の中じゃ、あなたのような腕っぷしの強い方は、ほんとに頼りになるんです。それにあなたは謎めいている。ある日ふらりと町にやってきて、住みついてしまわれたが、クラウドさんという尊いお名前のほかは、誰もなにひとつ知りやしない。なんでもここからさらに北を目指して旅をしていたとかなんとか、聞いたことはあるが……ここから北といえばもう例のあの大空洞に……

（クラウドの冷たい視線にぶつかって）いえ、こりゃ失礼をいたしました。詮索するようなまねをして。

クラウド

前にも云ったはずだ。おれは自分のことをしゃべる気はない。それでもいいからいてくれと云ったのはあんたたちだ。

金持ちの商人

（傍白、腹立たしく）この高慢ちきな野郎……（また愛想よく）ごもっともで。ほんとに失礼しました。なにしろ、あのメテオやら星痕症候群やらのあと、神羅はつぶれ

るし、魔晄炉は次々廃炉になるし、頼りになるものがなにもなくなってしまいましたからね。どこも自衛しなけりゃ……どうかお許しを。（慇懃に頭を下げる）

クラウド

で、なにを運んでほしいんだ？　あんたのとこの荷物はろくなものがない。まあ、金さえもらえりゃ文句は云わないが。

金持ちの商人

ええ、だからこっちもクラウドさんにお願いするんですよ。なにしろ、こんな世の中だ、まともなことばかりやろうとしてちゃ、破産してしまう。商売ってのは、要は最初にやったもん勝ちなんで、世界が新しくなったなら、こっちも新しいことをあれこれ模索しませんと……おわかりでしょ？　そりゃあわたしらだって、平和や秩序を愛してますよ、もちろん。だけども、世の中が乱れてるってときには、そういうまともな観念は、まあ、あまり役には立たないですからね。いや、これはあわれな商売人の愚痴、お忘れくださいよ。

クラウド

で？

金持ちの商人
今回は、届け先がちょっと特別なお得意さんでして、娼館を経営している男なんですが、運んでほしいのは女です。ま、女と云えるかどうかは……どっちかといや少女なんで……あなたもご存じの子ですよ。
クラウド
誰だ？
金持ちの商人
（はぐらかすように、あわれっぽい口調で）養わなけりゃならない家族がいるもんでしてね。弟と妹がひとりずつ。両親はすでに死亡。そういや星痕をわずらってましたっけ。不運なもんですなあ、そっちが治ったと思ったら、運悪く、あんなことで……
（ちらりとクラウドを見る）
クラウド
……（目を伏せる）
金持ちの商人
それで、いまやその子が大黒柱。両親の死後は、親戚の家で肩身のせまい思いをし

てましてね……なんでも、独立してきょうだい三人で仲よく暮らすのが夢だそうなんで。十代の、なんの経験もない娘が、家族を養うためにてっとりばやく稼げる商売といや、ま、そんなとこになるでしょうな。こういう不幸な子は多いんですよ。われわれは、いわば慈善事業をやってるようなもんです。本人の希望を叶え、客の欲望も叶える。これが世界を回しているってわけで。

クラウド

本人は納得してるのか？

金持ちの商人

もちろんですよ、喜んでます。まあ、その……本人はただのバーに就職すると思ってますがね。世間知らずってのはねえ！　ただのバーの給料の相場なんざ、知りもしないんだ。夜働くだけでこんなに、なんて喜んでましたよ。ま、こんな田舎町に住んでるんじゃしょうがないですがね。だましてるわけじゃないですよ、決して、だましてるってのとは違うんだ。ねえ、あなたならおわかりでしょう、世間と商いの世知辛さってやつですよ。だからあなたにお願いするんです。顔見知りのあなたなら、あの子も道中楽しいでしょうし、あなたに連れて行かれた場所なら、きっと文句は云わな

いでしょう……あなたは金次第で後腐れなくなんでもやってくださる方だし、要するに一石二鳥。これが正しい生き方ってもんです。そうでしょ？　誰も悪くない。みんな生きるのに必死なだけで、誰も悪くはないんだ。やりたくてやってるわけじゃない……誰も、なにもね。そのなかで、お互い支えあって、どうにか利益を出しあおうってなわけですよ。

クラウド

……高くつくぞ。

金持ちの商人

ええ、ま、そりゃ、交渉次第ですな。配送料は先方と折半しようってことになってるんでね。とりあえず、見積もりいただけますか。相談して、またご連絡しますよ。

クラウド

あとで届ける。

金持ちの商人

それじゃ、ま、どうぞよろしく！　それはそうと、今度一度、うちへ食事にお越し願えませんかな。家内のやつも喜ぶだろうし、あなたとお近づきになる名誉を……

クラウド

帰れ。

金持ちの商人

（あわてて店を出てから）ふう！　なんていやな、やりにくい男だ。あんな横柄な態度の商売人があるもんか。だがしかし、あの強さにゃ逆らえないし、なにより金次第でなんでもしてくれるからな……その点では、話のわかる男とも云える。せいぜいおだてて、うまく使わなけりゃ……だがしかし、きれいな男もあったもんだなあ。ああいう高飛車なやつってのは、たいがいそうだが。腹立たしいったらない。顔がいいってだけで、なにしても許されると思っていやがる……あの男がその手の店ででも働いたら、まったく見ものだろうよ！　今度の女よりか、実際、よっぽど稼げるだろうて！

（退場）

第二場

同じ舞台。クラウド、相変わらずカウンターの奥に物憂く存在している。椅子に座って、頬杖をついている。

鍛冶屋の亭主、見習いの男を従えて入ってくる。鍛冶屋の亭主は長身で、堂々とした中年男。見習いは、小柄な、色白の男で、亭主のあとを目立たないようについてくる。

鍛冶屋の亭主　クラウド、いるか？　頼まれてたもんができあがったんで、持ってきた。

クラウド　ああ……すまない。知らせてくれれば、こっちから取りに行ったのに。

鍛冶屋の亭主　いいんだ。これも仕事のうちってやつだからよ。指示のとおりに、刃こぼれは直しておいた。新品よりよくなってるはずだ……（合体剣の一本をカウンターに置く）

クラウド　（剣を手にとって、専門家らしく調べながら）ああ……期待以上だよ。

鍛冶屋の亭主

おれの腕を買ってくれてうれしいね。おれもあんたみたいな剣士の剣を直せて光栄だ。こんな複雑で、重たい剣を使いこなせるのは、あんたくらいだろうな。そのくせ、あんたはぜんぜんごつくもなけりゃ、むさ苦しくもない。むしろ華奢な感じだ。不思議だよ、まったく。あんたみたいなのがこの世にいるとはね。しかもめっぽう強いときた。あんたの剣さばきは見事だったなあ、なあ、見習い。

鍛冶屋の見習い

（顔を赤らめ、顔を隠すようにうつむいて）……ええ、ほんとに。

鍛冶屋の亭主

こいつは人見知りでな。そんなことじゃ、いくら腕上げたって商売できねえぞって、いつも云ってんだがな。

（話をしながらテーブルの前の椅子を引き、断りもなくどっかと座る）

まったく、最近はこのあたりでも、腕のいい職人が減っちまった。昔はあちこちにいたもんだ、おれの親父の時代にはな。いまじゃ隣近所の町や村あわせても、剣士の要望にまともに応えられる職人はおれくらいのもんだ。自慢してるんじゃねえ、寂し

いのさ。競いあう相手がいなくてよ……。

クラウド

（まだ戻ってきた剣を確かめている）まあ、時代ってやつかもな。

鍛冶屋の亭主

確かにな。……なあ、クラウド。町の連中は、あんたが話しかけにくいとか、おっかなそうとかいろいろ云ってるが、おれはちっともそうは思わねえ。剣士と鍛冶屋の仲だからかもしれねえが……あんたは、おれには率直にものを云ってくれてるとおれは思ってる。金だっていつも云い値を気前よく払ってくれるし、おれたちのあいだには、なんてんだ、信頼みたいなもんがあると思ってる。だからこそ、あんたはおれに仕事を任せてくれた……一流の剣士ってのは、自分の武器に対しちゃ、まったく、頑固な年寄りより気むずかしいもんだ。下手な職人には触らせもしねえ。あんたみたいな男のお眼鏡にかなって、おれはうれしいのさ。

クラウド

（剣の点検を終え、鍛冶屋の亭主と見習いのほうにまっすぐに視線を向けて）あんた、いい腕してるよ。

鍛冶屋の亭主
（破顔して）そりゃうれしいね。お褒めにあずかって光栄だ。
クラウド
昔、ある人が、おれにいい鍛冶屋の見わけ方を教えてくれた。（カウンターの上の剣を、首をちょっと傾けて見つめ、目を細めて微笑み）その人もきれいな刀を持ってた……銀色で……（指で刃を意味ありげに、ゆっくりとなぞる）びっくりするほど長くて、好きだった。
鍛冶屋の亭主
（指の動きに目をこらしながら、そこに、ある気配を感じとって）そうかい、そりゃあ……あのなあ、クラウド……
クラウド
（ゆっくりと指を動かし続けながら）あの刀、もうずいぶん長いこと見てない。ここに（あいているほうの手の指で自分の胸を差す）刺されたことがあるから、よく覚えている……（剣から指を離し、ひとりで微笑む）
鍛冶屋の亭主

……なあ……クラウド……前から思ってたんだが……（ふらふらと立ち上がって）あんた……なんでひとりでこんな田舎町にいるんだ？　寂しくないか？　おれはいつも、あんたは寂しそうな男だと思ってた。

クラウド

（からかうように）寂しい？　おれが？

鍛冶屋の亭主

（カウンターに向かって歩み出す）ああ、寂しそうだ、いつも。寂しそうで……（カウンターの前に立ち、クラウドを見下ろして、見つめる）

クラウド

寂しそうで、なんだ？

鍛冶屋の亭主

……もの欲しそうだ。

鍛冶屋の見習い、仰天して顔を真っ赤にし、ぶるぶる震えだす。鍛冶屋の亭主、クラウドの顎に手をかけようとする。

クラウド
（いまにも顎に鍛冶屋の亭主の手が触れそうになったとき、顔をそらして）ああ、そうだ、もうひとつ頼みたいことがある。（剣をとりあげてカウンターから出てくる）

鍛冶屋の亭主
（ちょっと拍子抜けしたように、店の中を横ぎるクラウドを目で追いかけながら）えっ、ああ……ああ、なんだ？

クラウド、テーブルの横につっ立っている鍛冶屋の見習いの前で一瞬立ちどまり、彼に視線を向け、かすかに微笑んだかに見えるような表情を浮かべる。ドアを開け、フェンリルに剣をしまう。店内に戻り、ドアにもたれかかる。

クラウド
実は、ナイフがほしいんだ。

鍛冶屋の亭主
ナイフ？
クラウド
これくらいの（指と指で二十センチくらいの幅を示してみせる）、万能ナイフ。やっぱり、一本あると便利でね。
鍛冶屋の亭主
ああ、それくらい、お安いご用だが……。
クラウド
じゃあ、頼んだ。あんまり凝ったものじゃなくていいから、任せるよ。悪いが、これから仕事がある。もう帰ってくれ。
鍛冶屋の亭主
ああ……わかった。ナイフだな。万能ナイフ。いい響きだ。おれもナイフは好きだ……すまん、長居したな。でも、また来るぜ。（クラウドをじろじろ見つめながら、ドアの外へ移動し、退場）

鍛冶屋の見習い、あわててあとに続く。クラウド、鍛冶屋の見習いが通り過ぎるとき、小さく微笑む。鍛冶屋の見習い、真っ赤になって、クラウドから目をそらすように頭を下げ、大急ぎで出て行く。クラウド、ひとり意味深に微笑む。

第三場

同じ舞台。クラウド、カウンターの奥に座っている。ヒマそうに頬杖をつき、つまらなそうな気配。

詩人、入ってくる。やせっぽちで、貧しく、風采のあがらない身なり。大きな花束を抱えている。

詩人　こんにちは、クラウドさん、いいえ、もうこんばんはですね。

クラウド

（詩人のほうを向きもせずに）またおまえか。

詩人

ええ、そうなんです、すみません。どうかご機嫌をなおしてくださいませんか。今日はあなたに捧げるために、花を持ってきました。このまま飾っておけますよ、あなたは花瓶なんかお持ちじゃないだろうから……あなたに捧げるぼくの詩を書いたカードもついてますが、これは読まないで捨ててくれたっていいんです。

クラウド

謝るなら来るな。みんなして、いつもそれだ。どうかご機嫌をなおしてください……おれにご機嫌でいてほしいなら、よけいな話なんかしに来てほしくないね。特におまえだ。仕事をくれるわけでもないくせに。花はそのテーブルの上にでも置いといてくれ。

詩人

（花を置き、しみじみとその姿と香りを楽しんでから）だって、ぼくは詩人なんですよ。届けてもらうものなんか、なにもないんです。ぼくの詩のほかには。ああ、でもぼくの詩を、誰が読んでくれるだろう。誰もいない。どこにいるんだろう、ぼくの読

者は！

クラウド

うるさいぞ、帰れ。

詩人

いいえ、帰りません。あなたを見ていると、ぼくは次々に詩が浮かぶ。あなたの金髪、あなたの美しい青い瞳、あなたという人は、どこもかしこも美しい。ぼくはあなたの名前をあがめたい。その名前の下に、自分を投げだして、粉々にされたっていい、あなたほどの人なら。

クラウド

（ちょっと心を動かされたように首を傾けて）酔っぱらってるな。

詩人

ええ、ええ、そうです、あなた方からしたら、ぼくたち詩人はいつでも酔っぱらい。しらふのときなんて、永久に来やしないんだ。それはわかっている。ぼくらは自然の友、人間のできそこない。みんなからしたら、とんだお笑いですよ！

（だしぬけにカウンターへ近づいて）あなたの目をよく見せてください。

クラウド
（思わず後ずさりして）急になんだよ。帰れよ。
詩人
帰りませんったら。ぼくにはわかっているんだ、あなたの寂しさ、あなたの孤独……あなたはなぜこんな北の田舎町におひとりでいるんだろう？　なにかから逃げているのか、それともなにかを追いかけているのか、あるいは待っているのか……ぼくにはわからない。あなたがなにかとてもつらい過去をお持ちで、とても寂しがっているという以上のことはわからない。あなたを見ていると、たまらない気持ちになるんです。あんまり暗く、沈んでいるように見えて……存在が満たされない悲しさのようなものに満ちて。ああ、ぼくの詩があなたをなぐさめられたら！　でもあなたは詩をお好みになるような方じゃない。そんな人なら、あなたのようじゃない……なんて役立たずなんだろう、ぼくは！
クラウド
いかれてるな。
詩人

あなたはそうおっしゃいますが、ぼくは信じない。あなたがこれまでの人生で、ただの一度も、詩人からの賛美を受けたことがないなどとはね。そんなことはあり得ない。あなたは十人の、いえ、百人の詩人だって、ひざまずかせることがおできになる……あなたは美しい、これはなにものにも勝る価値であり宝であり、真理です。ただそれだけで、あなたはなにをしても許される、世界を支配するに値する。あなたのために、ぼくは百万も詩を書きたい。そのために夜も眠れないほどなんです。ぼくみたいな三文詩人でさえそうなんだから、本物にいたっては、なにをかいわんやです。

クラウド

おれのそばに詩人なんて……ああ、わけのわからないこと云うやつはいたか。

詩人

まあ、あなたの賛美者が詩人とはかぎりませんがね。賛美の方法にはいろいろありますから。ぼくがたまたま詩人なだけで……すべての賛美に共通する願いは、あなたを想い、あなたを愛し、あなたを慕って、あなたを永遠の存在にとどめたいということなんです。あなたを歌うことで、その歌のなかであなたの存在は永遠になる。あなたをあがめることで、あなたは聖なるものになる……でも、こんな話、きっとあなた

にはつまらないでしょうね。あなたはもっと生々しい、激しい感情のほうをお好みでしょう。あなたをとらえ、退屈や倦怠からもぎ離して、生の充足感をくれるような。

クラウド

小難しいって意味なら、いまの話は確かにつまらない。

詩人

ああ、もしもぼくが詩人でなく、こんなに十人並みの容姿なのでなかったら、あなたに恋をしたでしょう……そしてぼくの言葉だけでなく、全存在をあなたに捧げたでしょう、それこそ命まで……それは名誉なことですよ。あなたには、想像がつかないかもしれませんが。

クラウド

（小さく微笑んで）じゃあ、おれのところに来るやつは、みんなそう思ってるとでも？

詩人

ええ、自覚の有無はさておき、あなたを愛して、あるいは憎んで。あなたはそういう方です。愛するか、憎むか。無関心ではいられません。あなたの前で、適度な距離を保てる人がいるとは信じられません。いたとしたら、その人間はほんとうの意味で

生きていないんです。でも、あなたは冷たく無関心。ぼくにはわかっています。あなたは、ぼくたち有象無象にはまったく関心がない……誰か、あなたの心を動かし、あなたの愛を呼び覚ますに足る人以外は。ああ、その人は、きっとすべてを手に入れた気がするでしょうよ、あなたという人から想われているのなら、それは世界を手にしたのと同じことですよ。

クラウド

（なにかを思いだすような顔で微笑む）

詩人

ほら、ごらんなさい。あなたにはちゃんとした賛美者がおありだ。幸福な人だ、その人は……あなたの奴隷か、主人か知りませんが。あなたは、その人をいまも想いつづけていらっしゃるんでしょう、きっと、とても深く……。

クラウド

おまえって、ずいぶんずけずけものを云うやつなんだな。

詩人

仕方ありませんよ、詩人なんだから。性分なんです。詩人とは、みずから語り、人

にも語らせる者のことです。ですからね、さあ、観念しておっしゃってください。あなたはその人から逃げているんですか、それともその人を追っているんですか、あるいは待っているのでしょうか……。

クラウド

どれも違う。殺した。

詩人

……（かなりの間のあと、たとえようのない同情と賞賛とあわれみをこめた嘆息）ああ……ああ……そうだったんですね……。

クラウド

派手に殺しあいをやった、何度か。それで気がついたんだ、おれはあいつを殺せる。何度でも。刺し殺して、息の根を止めてやれる。でもあいつはそれができない、最後の最後で、おれに甘いんだ。おれはそれが悔しいし、腹が立つ。

詩人

ああ……わかるような気がします。確かにあなたは、殺せるでしょう、その人を。あなたはそういう方だから。そして相手の方に、同じものを求めていらっしゃる、あ

なたと同じような熱量を、同じような情熱を、同じほどの愛を。残酷な方だ！　あなたはほんとうは、ご自分がこのうえもなく愛されていることをわかっていらっしゃる。でも、その人があなたの息の根を止めるまで、満足はなさらない。

クラウド
しないね。だから、また戻ってきたら、また殺してやろうと思ってる。

詩人
では、あなたは待っている……

クラウド
どうだろう。探すのにも飽きたし、追いかけるのにも飽きたし、待つのも飽きた。おまえ、おれのこと好きか？

詩人
そんな質問をされると心外です。こんなにあなたをあがめているのに。

クラウド
ふーん……でも、やめた。つまらなそうだから。

詩人

悲しいですが、おっしゃる通りだと思いますよ。どうかぼくに、これまでのようにあなたを一方的に慕わせてください。ぼくにはそれがいい。あなたにも、そのほうがふさわしい。自分のものにしたいと思わせるような美しさは、ただの低俗なポルノです。あなたの美はそのようなものじゃない。あなたの美は、感嘆し、畏怖し、あがめるために存在するんです。それこそがほんとうの美なんです。ぼくたち詩人があがめる美の力……そしてあなたはそのもっともうるわしい顕現です。どうかぼくのようなので品位を汚さないでください……でも、ぼくは名誉に思いますよ、あなたがこんなにいろいろとうち明けてくださって。

クラウド

どうかな。全部うそかもしれないだろ。

詩人

そうかもしれない。あり得ます。でも、そうだとしたらそれはそれで、あなたへの尊敬と賛美の心がつのるばかりです。こんなところで自暴自棄になって、身を滅ぼしかけているように見えるけれど、あなたはやっぱり気高くて、美しい方ですよ。たとえ過去に山ほど罪を犯していたとしても、あなたの罪は罪ではなく、罰せられること

もない。あなたの行為は、愛と、あるいは真実の情熱と呼ぶべきものです。ぼくは今日、それを確信しました。

クラウド

買いかぶりすぎだ。この町で、おれに気があるやつがどれくらいいるか知ってるか？

詩人

ええ、悲しいかな、それはあなたの宿命ですよ。行く先々で、あなたはそういう目にお遭いになるでしょう。この世の者どもは美に対して、あまりにも、いわば性器でしか反応しない。あなたの美を正しく受け止めることができるのは、芸術家とおさなごのような者だけです。地上のあらゆる束縛から自由な、このひと握りの人種だけ。ですから、ね、クラウドさん、あなたが待っていらっしゃる方が、早くお戻りになるようぼくは祈っていますよ。今日帰ったら、ぼくはそのために祈りながら詩を書きましょう。あなたは、誰かひとりの人をそばに置いておかなくてはいけないんです。傷つかないために、けがされないために。あなたのような方は、決してひとりでいるようにはお生まれになっていない。あなたは愛され、愛のもたらすあらゆるものを身に受けるためにそんなふうに美しいんですから……あなたは……

クラウド

もういい、飽きた。帰れ。

詩人

ご命令とあらば、お言葉どおり帰ります。

（胸に手を当ててうやうやしく一礼し、ドアの外に出てから）ああ、美しい人！　そして残酷な人よ！　誰もその花弁の奥に触れることのかなわない、美しい一輪のバラ。

（退場）

クラウド、詩人がひとり語っているあいだに、カウンターから出て来て、目を細めて花束の香りを嗅ぐ。椅子を引いて座り、詩が書かれたカードをとりあげて読み、放りなげて、頬杖をつく。

第四場

同じ舞台。クラウド、カウンターの奥につっ伏している。詩人にプレゼントされたテーブルの上の花は元気をなくしている。

ワンピースの少女、スキップしながら入ってくる。薄紅色のワンピースを着て、おさげにした髪にはリボンをつけている。後ろ手に、花束を持っている。

ワンピースの少女
　こんにちは、クラウドさん！

クラウド
　……今日は店は休みだ。

ワンピースの少女
　どうしたの？　クラウドさん、具合が悪いの？　病気なの？

クラウド
　いや、そうじゃない。でも、今日は店はやってないんだ。だから帰れ。

ワンピースの少女
　じゃあ、明日来たらお店、あいてる？　あたしのお願い、聞いてくれる？

クラウド
（ゆっくりと体を起こして）仕事の依頼なのか？
ワンピースの少女
うん！　お花を届けてほしいの！　（後ろ手に持っていた、野の花を摘んでひとつにした花束をさし出す）
クラウド
（思わず微笑んで）誰にだ。
ワンピースの少女
隣町のブリギッタによ。あの子、いま病気なの。それで、あたし、午後からあの子にあげるお見舞いのお花、摘んできたのよ。
クラウド
……きれいな花束だ。
ワンピースの少女
そうでしょ？　クラウドさん、これ、ブリギッタに届けてくれる？　あたし、お小遣いの三ギル、お礼にあげる。

クラウド
　お礼はいらない。用事のついでにできるようなことだから。
ワンピースの少女
　それはだめ！　姉さんが、人になにかお願いするときは、お礼しなさいって云ったの。仕事たのむときは、お金、必要なんでしょ？
クラウド
　おまえの姉さんが……そうだな……じゃあ、その花束の花、一本おれにくれないか。
ワンピースの少女
　そんなお礼でいいの？
クラウド
　いいよ。このコップに挿そう。花瓶ないんだ。（カウンターの奥から、小さなガラスのコップを出してくる。カウンターを出て、ワンピースの少女のもとへ歩いていく）
ワンピースの少女
　（花束から、真剣に赤い小さな花を選びだして）一本だから、一番きれいなの、クラウドさんにあげるね。これでどう？

クラウド
　ああ、気に入ったよ。ありがとう。（少女の背の高さにしゃがみこむ）
ワンピースの少女
　（さし出されたコップに花を挿して）ぴったりね！

　クラウド、ワンピースの少女、ふたりともしばらく小さな赤い花に見とれる。

ワンピースの少女
　お花、きれいね。でも、このテーブルのお花は枯れかけてるわ。どうしたの？
クラウド
　ああ……もらったんだけど、水をやるのを忘れてた。
ワンピースの少女
　もう、だめじゃない！　あたし、やってあげる。
クラウド
　じゃあ、おまえにやるよ。家で世話してくれるか？

ワンピースの少女
　うん、いいわよ。あたし、お花のお世話、得意なの。きっとまた元気になるわ。だけど、ねえ、クラウドさん、クラウドさんはどうして元気ないの？
クラウド
　なんでもないんだ。ちょっと疲れてるだけだ。
ワンピースの少女
　ほんとう？　あたし、いつも思ってるの。クラウドさんて、いつもすごく悲しそう。
クラウド
　悲しそう？　……そうかな。
ワンピースの少女
　そうよ。
クラウド
　まあ、……そうかもな。
ワンピースの少女
　どうしてなの？　もしかして、誰か、大事な人が死んじゃったの？　あたしの父さ

んと母さんみたいに……あたし、父さんと母さんが死んじゃったとき、悲しくて、毎日泣いたの。いまも悲しいわ。

クラウド
　死んではいないよ。生きてる。会えないだけだ。

ワンピースの少女
（思わずクラウドの服をつかんで）……その人、遠くにいるの？

クラウド
　まあな。

ワンピースの少女
　そう……じゃあ、クラウドさん、毎日寂しくて、悲しいわね。

クラウド
　……そうだな。

ワンピースの少女
　でも、いつか会えるんでしょ？　もう会えないなんてこと、ないんでしょ？

クラウド

そう思うよ。会っても喧嘩ばっかりしそうだけど。

ワンピースの少女

そうなの？　あたしと兄さんみたいに？　あたしも兄さんと、よく喧嘩するの。兄さん、乱暴なんだもん。

クラウド

（微笑んで）そうだな……兄さんとよく喧嘩するならわかるだろうけど、おれもその人としょっちゅう喧嘩して……まあ、喧嘩したっていうか、おれが勝手に怒ってただけだけど……でも、喧嘩したことなんかすぐに忘れて、また喧嘩する。

ワンピースの少女

あたしと兄さんもそう。すぐ仲直りして、すぐ喧嘩するの。でもね、そんなこと、ほんとは別にいいの……。

クラウド

うん、わかるよ。仲がいいんだな、おまえ、兄さんと。

ワンピースの少女

まあね……あ、そうだ！　ね、クラウドさん、こないだ、姉さんから手紙が来たの。

それでね、姉さん、思ってたよりずっと、ずっといい仕事につけたって。行くはずの町と別の町に行ったの。なんでかはわかんないけど。でもね、そこで、すごくいい仕事につけたんだって。だから、心配しないでって。しばらく働いて、お金が貯まったら、兄さんと三人でまた一緒に暮らそうねって書いてあったの。

クラウド

そうか。よかったな。

ワンピースの少女

うん！　姉さんが出ていっちゃって、あたし、ほんとに寂しかったの。だから、また一緒に住めそうってわかって、うれしい。

クラウド

きっとそうなるよ。

ワンピースの少女

それから、姉さん、クラウドさんによろしくって。ずっと感謝してるって。クラウドさん、助けてくれたでしょ、はじめてこの町に来たとき、森で、あたしたちのこと。こんなおっきなモンスターにおそわれて、怖かったわ……父さんと母さんは死んじゃ

ったけど、クラウドさんが来てくれなかったら、あたしも姉さんも兄さんも、きっと死んじゃってた。だから、姉さんも兄さんもあたしも、クラウドさんに感謝してる。感謝は忘れちゃいけないって、母さんよく云ってたわ。いまは、母さんのかわりに、姉さんがそう云うのよ。

クラウド

……同じこと、おれの母さんも云ってたな。

ワンピースの少女

じゃ、おそろいね！　あ、いけない！　もう帰らなくちゃ。おばさんにお使いたのまれてたの。遅くなると怒られちゃう。じゃあまたね、クラウドさん。（テーブルの上の花束をとりあげて）あんまり悲しまないで。きっといいことあるから、あたしみたいに……このお花、もらっていくね。それから、あたしのお花、間違いなくブリギッタに届けてね。

クラウド

（笑って）ああ、生花だからな。枯れる前に、いまから行くよ。

ワンピースの少女、来たときと同じようにスキップしながら退場。少女とすれちがうように、金持ちの商人が入ってくる。怒った、すごみのある顔つきをしている。

金持ちの商人
　クラウドさん、ちょっとお話があるんですがね。
クラウド
　あとにしてくれ。いまから配達があるんだ。
金持ちの商人
　いいや、そうはいきません。あなた、こないだお願いした女、覚えているでしょう。
クラウド
　それがどうした。
金持ちの商人
　それがどうした？　あんた、知らないとは云わせませんよ。
クラウド
　おれはなにも知らない。

金持ちの商人
　よくもぬけぬけと。あんた、あの女をどこへ運んだ？
クラウド
　ちゃんと店に届けただろ。
金持ちの商人
　ああ、確かに、一度はね。だからこちとら代金を支払った。ところがだ、その女、何日かして、どっかへ消えちまいやがった！
クラウド
　逃げたんだろ、自分がどういう店に来たのか気づいて。
金持ちの商人
　ああ、逃げたんだろうよ、逃げたに決まってるとも！　問題はだ、誰が手引きしたのかってことなんだ。あの女は、あの町に知りあいなんかひとりもいない。そういう女をわざわざ選ぶんだからな……。
クラウド
　ご苦労な商売だ。

金持ちの商人
（怒りを見せて）その余裕、いつまでも持てると思うなよ……女が、黒くてばかでかいバイクに乗って町から出て行くのを見たやつがいる。ちょうど、そこの入り口のとこに停まってるようなバイクにだ。これをどう説明するね、クラウドさんよ、ええ？あんた、ちょっと剣の腕が立つからって、必死に商売してる人間をなめてもらっちゃ困る。こちとらここ数年、世の中ごたごた続きでただでさえ迷惑してるんだ。商売人はみんなそうさ。誰も彼も、必死で生きてるこのときに、そんなおセンチな同情なんざ見せられた日にゃ、笑えてきてくそくらえだ。
クラウド
あんたの商売のことなんか知らないし、おれはなにも知らない。たぶん、別の誰かのバイクだろ。
金持ちの商人
……そうかい、あくまでそういう態度ですかい。
クラウド
要はクレームつけにきたってことだろ？　おれだって商売だ、返金すれば満足か？

（カウンターの奥から金をとって出てくると、男につきつける）

金持ちの商人

ばかにしやがって！　覚えてろよ！　（ドアに向かってずんずん歩いていく）

クラウド

……覚えていたいような顔じゃないな。

金持ちの商人

（店を出てから）この野郎、覚えてやがれ。腕力がなんだ、剣の扱いがうまいからってなんだ？　おれには金があるんだぞ、金と力が……おれのような男を怒らせるとどうなるか見せてやる……あの小ぎれいな顔、前からいまいましくて仕方がなかった。自分以外をみんな見下して、ばかにしてるってあの面……しかし、顔……そうだな、確か……いや、こいつはいい……（にやにやしながら退場）

クラウド、肩をすくめ、ワンピースの少女が預けていった花束をとると、店を出る。

第二幕

同じ舞台。クラウド、カウンターの奥に座って、けだるく、憂鬱そうにしている。詩人、赤い花を挿したコップが乗ったままの、中央のテーブルの前に立っている。

詩人　ですから、クラウドさん、あなたはもうこの町にいらしてはいけないんです。あの金持ちの商人は、あなたをすっかり目の敵にして、あることないこと云いふらして、あなたを心にかけている人間の気持ちを、すっかり憎しみに変えてしまおうとしているんです。そしてあなたを、追いだすならまだしも、きっと殺そうとしているんですよ、みんなを焚きつけて……。

クラウド　憎まれるのには慣れてるよ。

詩人　そんなことをおっしゃって、あなたはこんな田舎町の人間が団結すると、どれだけ

おそろしいかわかっていないんですよ。感情が燃えあがって、理性なんか簡単に吹きとんでしまって、どんな残虐なこともやってのけるんですから……。

クラウド

（微笑んで）魔女狩りかなにかみたいに？

詩人

ああ、あなたはほんとうに、思いがけなく本質を云いあてる方です。ええ、魔女狩りです。魔女狩りですよ、これは。正真正銘のね。

クラウド

おれは男だ。

詩人

性別の問題じゃありません。ぼくは浅はかな人間どもによっておとしめられ、けがされるもののことを云っているんです……。

クラウド

よくわからないが、おれは平気だ。こんなことは前にもあった……。

鍛冶屋の女房、用心深く周囲をうかがいながら入ってくる。店に入ると、頭に巻いていたスカーフをとりさって、床に投げつける。面長の、美人とはいえない顔があらわれる。

鍛冶屋の女房
　ああ、ちくしょう、いまいましいよ！　いるんだろ、あたしの亭主が！

クラウド
　……いきなり来て、なんの話だ？

鍛冶屋の女房
　ふざけんじゃないよ！　この上あたしを愚弄するつもり？　あたしの亭主の鍛冶屋はどこにいるかって訊いてんだよ。そりゃあ、あたしは女だよ。男になんて勝てるわけない。だけどもさ、そのちっこい女のあたしにも、プライドくらいある。まったくいまいましいよ、ほんとにいまいましくて、いまわしいよ！

クラウド
　……話が見えないんだが。

詩人

鍛冶屋の奥さん、どうか落ちついて、落ちついてください。

鍛冶屋の女房

うるさいよ、まともに働いてもいない貧乏人ふぜいが、あたしに触らないでおくれ、汚らわしい。あんたもこの男に惚れこんで、二日と空けずにここに来てる口だろ、うちの亭主と一緒でさ！　なにが頼まれてるナイフの打ち合わせだ、ふざけやがって、こんなことは、町じゅうみんな知ってるんだよ。おかげであたしはみんなにばかにされて、笑われて、男のケツ追っかけてる亭主の女房って云われて、ほかにもとても口にできないようなことまで云われて、あたし、あたし……ちくしょう、みんなくたばっちまうがいいよ！（泣きだす）

クラウド

（心底うんざりした顔で）云ってもむだだと思うが、どう考えても誤解だ。

鍛冶屋の女房

ああ、憎たらしいったら、そのお高くとまった態度！　ちくしょう、あんたが女なら、引っかいて、喉切り裂いて、鶏みたいにくびり殺してやるのに！　悪魔！　悪魔

だよ！　男のくせに、そんなきれいな顔して。あたしの亭主ひっかけて。あんたが女だったら、女でさえいてくれたら！　ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう！

鍛冶屋の亭主、入ってくる。女房がいるのを見て、ぎょっとするしぐさ。

鍛冶屋の亭主
　てめえ、なんでこんなとこにいやがるんだ。

鍛冶屋の女房
　はん、あんたとは違う理由でね！　今日も愛しい男に会いに来たってか。あたしをなんだと思ってるんだ、この色きちがい！　いままでだって、得意先の女房だの、近所の若いのだので、さんざんあたしを苦しめた。その仕上げがこれかい、あたしに恥かかせやがって！

鍛冶屋の亭主
　（かっとなって）恥かかせただ？　てめえのこと棚に上げて、よくもぬけぬけと。最初に恥をかかせたのはどっちだ？　てめえのほうじゃねえか！

詩人
（割って入る）まあまあ親方、落ち着いて……奥さんも……。
鍛冶屋の亭主
うるせえ、すっこんでろ！（詩人を殴り、蹴飛ばす。詩人、ドアの外まで転げ出る）
詩人
あ痛！　まったく、なんて乱暴な！　だけど、こりゃあぼくの力で止めるのは無理だ……そうだ、あの見習いさんを呼んでこよう。（退場）
鍛冶屋の亭主
（女房に向かって嘆きながら）ああ、あのころのおれにはわからなかった。おまえは若くて、おれの鍛冶職人としての腕と誇りに惚れこんでくれてるとばかり思ってた……ところがどうだ、ふた開けてみりゃ、てめえが惚れたのはおれの稼ぎだけ。金が足りなきゃすぐに不機嫌になって、当たり散らしやがる。てめえの頭にゃそれだけさ、金、金、金だ！　要するに、てめえは結婚する前からおれのことを裏切ってやがった。ほんとうの意味で夫婦になったことなんざ、おれたちは一度もねえのさ。その分際で、おれがてめえに恥をかかせただ？　てめえのことだよ、この恥知らずが！　強欲の淫

売め、家から放り出してやる！　娼婦にでもなって、金持ちの男にでも腰振ってりゃあいい！

鍛冶屋の女房

鍛冶屋の腕だ？　男の誇りだ？　そりゃあ、あんたは腕のいい職人さ。そんなこたあ、あたしだって知ってるよ。その意味じゃ、あんたは確かにいい男さ、自分の腕を鼻にかけて、なにしても許されるなんて思ってるんでなけりゃ、まったく最高だよ！　家じゃふんぞりかえって、あたしを召使いかなにかと思ってさ、夫としての心づかいなんて、一度も見せてくれたことない。記念日に花の一本だって、贈ってくれたことがある？　あんたが行く先々で、お得意さんの女房や若いのに色目使ってること、あたしが気づいてないとでも思ったの？　あたしはさんざんあんたの噂に苦しんで、町の連中の冷やかしやからかいに耐えて、それもこれも、あんたが夫で子どもの父親だからじゃないか！　それをよくも、あたしを恥知らず呼ばわり！　あんたにこんなに尽くしてるあたしを！

鍛冶屋の亭主

へっ、なにが尽くしてるだ！　てめえがおれんとこの見習いとどうなってるか、て

めえがあいつにどんな顔して、どんな目つきして接してるか、おれは知ってんだ。あいつだけじゃねえ、これまでうちにいた若い男全員にな！　だからてめえは売女だってんだ。おれの腕が衰えてきやがったら、そのご自慢の色気でさっさと若いのに乗り換えりゃいい、一生食うに困らねえだろうよ！

鍛冶屋の女房

殺してやる！　殺してやる！　（亭主につかみかかる）

鍛冶屋の亭主

いい気になりやがって、この女狐！

亭主、女房を殴り倒す。女房、床に倒れ、亭主、女房をさらに殴る。女房、必死に起きあがって亭主とやりあい、もみあうが、ひどくぶたれて倒れる。

鍛冶屋の見習い、入ってくる。

鍛冶屋の見習い

親方！　奥さん！　（あわてて倒れている女房に駆けより、抱き起こす）

鍛冶屋の亭主
奥さん！　だと。けっ！　（床に唾を吐く）
鍛冶屋の見習い
奥さん、お怪我はないですか？
鍛冶屋の女房
（弱々しく震えながら）ああ……あんた、来てくれたのね……。あたしの顔、きっとあざになってるわね、ひどく殴られたから……。
鍛冶屋の亭主
（怒り狂って）てめえら離れろ！（ふたりを引き離しにかかる）
鍛冶屋の見習い
親方、どうか落ちついてください。こんなことじゃ、あなたの名誉に関わりますよ。人様の家で、こんなみっともない夫婦喧嘩なんかして……奥さんもいい加減にしてください。
鍛冶屋の亭主
うるせえ、半人前野郎が、とやかく云うんじゃねえ！

鍛冶屋の女房

あたしは悪くない。みんなうちの人が悪いんだ。このいけすかない男と、それに輪をかけていけすかないあの悪魔みたいな男が悪いのさ！　（クラウドを指さして）なにさ、スカした顔して、自分は関係ありませんって態度でさ。あんたのせいだよ、なにもかも、あんたがこの町に来てからおかしくなったんだ。この化け物、悪魔憑き、男女！

鍛冶屋の亭主

この野郎、この人はおれの客だぞ！　大事な上客だ、今日だって、おれは頼まれたナイフを……（ふところからナイフをとりだす）

鍛冶屋の女房

ふんだ、剣だナイフだなんだって、どこまでほんとだかあやしいもんだよ。ああ、ほんとに情けない。こんな男と夫婦だなんて。だけど、ほんとに悔しいのは、うちの亭主が色ボケだからでも、男に惚れてることでもないんだ。悔しいのは、あたしがどうあってもこの小ぎれいな男にゃ勝てないことよ。色なんか白くってさ、あたしが見たってどぎまぎするほど色っぽくってさ、なんて顔してるんだろ。悪魔の顔だよ、こ

んな顔……こんな男……こんな……ああ、憎いったらないよ！

鍛冶屋の見習い

……奥さん、どうかクラウドさんのことを悪くおっしゃらないで。あの人はなんの関係もないんです、そうでしょう？　これはあなたたち夫婦の問題でしょう。そんなふうに云っちゃいけません。そんなふうにあの人のことをとっては……

鍛冶屋の女房

（真っ青になって）あきれた！　ああ、おぞましい、あんたもなのね！　あんたもあの男が……ああ、ああ、こんなことなら、地獄にいるほうがまし！　こんなに侮辱されて、ばかにされて、なにもかも奪われて、いったいあたしをどうしたいの！　この悪魔、悪魔！　なんとか云ったらどう？

クラウド

……ナントカ。

鍛冶屋の女房

（体じゅうをかきむしって）ああ、ばかにしやがって！　きれいなやつはいつもそう、ただそれだけで、みんな許されると思ってる。ちやほやされて、みんなに好かれて、

あたしの容姿を見るがいい、あんな顔と比べられたら！　あんな悪魔みたいに整った顔と！　みじめなあたし、なんてみじめなあたし。器量がよくないばっかりに、誰もあたしをほんとには愛してくれなかった……この人だって、あたしがも少し器量よしだったなら……だけど、そんなこと、あたしにどうにかできること？　なんて不公平なんだろ！　こんなことなら、生まれてこないほうがましだった、あたし、気が狂ってしまう。死んじまいたい、みんな死んじまうがいいよ！

女房、亭主が手にしているナイフをつかみとり、自分の胸をひと突きする。

鍛冶屋の亭主
　おい、フリッグ！　フリッグ！　うそだろ、なんてこった！

鍛冶屋の見習い
　ああ、そんな、奥さん！　奥さん！

鍛冶屋の亭主と見習い、女房を揺さぶるが、口から血を流し、こと切れて、ぴくり

とも動かない。クラウド、相変わらず無関心に傍観している。
異様な間。

鍛冶屋の見習い
……親方、あんたのせいですよ。

鍛冶屋の亭主
なんだと？

鍛冶屋の見習い
あんたのせいです。あんたが奥さんを大事にしないで、あちこちの女にうつつ抜かして、おまけにクラウドさんにまで……（怒りで顔を赤らめる）

鍛冶屋の亭主
そういや女房が云っていた、まさかおまえ、クラウドを……

鍛冶屋の見習い
あの人の名前を気安く呼び捨てにしないでください。むかむかしてくる。あの人はいい剣士です。あんたの腕なんか、あの人の握る剣にはふさわしくない。あの人のあ

の手……あの白い指……ぼくはまともに見たこともないけれど……（クラウドに向き直って）ああ、クラウドさん、こんなことになって申し訳ありません……ぼくは……いつかあなたの手が握るにふさわしい剣を一本、打てることを夢見て……（カウンターの前によろめき、ひざまずく）

鍛冶屋の亭主

この野郎、男の前にぬかずきやがって、てめえのようなやつ、おれの家から出ていけ！

鍛冶屋の見習い

（クラウドの前に身を投げ出したまま）親方にののしられたって怖くない。あんたのような、なにも知らない、あわれな男になんか。うぬぼれて、自分の腕を信じすぎて、最近じゃ、仕事に対する真剣な気持ちをなくしてた……ぼくはそんな男に、クラウドさんの剣をあずけたくなかった。だから、あんたが仕事を終えて寝静まった夜中に、こっそり鍛冶場に火をたいて……

鍛冶屋の亭主

……うそだ。

鍛冶屋の見習い
　ぼくが直した。ぼくが作った。この人の剣、この人にふさわしい剣、美しくて、鋭くて、血を吸った冥府のようで、でも神聖で、暗くて、燃えている……
鍛冶屋の亭主
　うそだ、うそだ！　この野郎！　なにぬかしやがる！
クラウド
　（ふっと微笑んで）知ってた。
鍛冶屋の見習い
　（はっとして顔を上げる）……クラウドさん、そんな……あなたは……ぼくを、ぼくの仕事を知って……
クラウド
　知ってたよ。あんたいい腕してるな、って、おれはあんたに云ったんだ。この男じゃなくて。（カウンターから出てきて見習いの前に立ち）あんた名前は？
鍛冶屋の見習い
　アーナルです、クラウドさん……ああ、クラウドさん……（クラウドの手をとり、

ほおずりをし、口づける）

ああ……あなたの手だ……剣を握る男の手とは思えない……しなやかで、白くて、美しい……ぼくの……ぼくの想っていた手。

クラウド

（微笑をたたえて見習いを見下ろしながら）うぬぼれって、怖いよな。

鍛冶屋の亭主

この……この……悪魔め！　（ナイフをつかみ、クラウドに挑みかかる）

鍛冶屋の見習い

危ない、クラウドさん！

見習い、クラウドの前に立ちふさがり、ナイフの刃をまともに受けるが、必死にナイフを奪いかえし、亭主を刺す。

鍛冶屋の亭主

うっ……くそ、くそっ……　（倒れる）

鍛冶屋の見習い
（クラウドのほうを向いて）ああ……クラウドさん……あなたがご無事でよかった……でも……あなたはどこから来たんですか？　天国ですか？　それとも冥府の底ですか？　あなたはほんとに、美しい……美しくて……

見習い、もどかしげに、すがるようにクラウドに手を伸ばすが、届かず床に崩れ落ちる。鍛冶屋の女房、亭主、見習いが、折り重なるようにして倒れる形になる。
クラウド、重なった三つの死体を見下ろして、肩をすくめる。

ふいに、ドアをノックする音。

クラウド
誰だ？
高くもなく低くもない、奇妙な声
クラウドさんのお宅はこちらで？

クラウド
そうだが、いまちょっと立てこんでるんだ……

ドアが開いて、黒マントの男が入ってくる。全身を黒いマントですっぽり覆っており、猫背で、丸まっていて、背の大きさや性別などが定かでない。のろのろと舞台中央へ進み、折り重なって倒れた死体の前で立ちどまる。

クラウド
……誰だ？
黒マントの男
冥府から来ました。
クラウド
（興味がなさそうに）ふうん。死者の魂でも受けとりに？
黒マントの男
（奇妙な声で笑う）

クラウド
　なんでもいい、さっさとすませて出ていってくれ。あんたを見てると、いやなことを思いだす。
黒マントの男
　それはまたどんな？
クラウド
　昔、あんたみたいなのを大量に見た。
黒マントの男
　そうですか。確かにわたしに似た者はたくさんいる……いや、いました。いまはほとんど残っていない。
クラウド
　あんた、まさか……いや、そんなわけないか。
黒マントの男
　なにか？
クラウド

なんでもない。とっとと失せろ。

黒マントの男

まあそうおっしゃらずに。ここには実に奇妙な対比がある。テーブルの上には美しい可憐な花、テーブルの下には血を流した人間の三つの死体、どちらも赤い。そしてそれらを冷たく見つめているあなた。なににも増して、あなたは美しい。

クラウド

（ちょっと笑って）冥府のやつって、お世辞が云えるのか。

黒マントの男

まさか。真実だけを語ります。でも、あなたはどうやらほめられることに弱いようだ。

クラウド

悪い気はしない。でも、どうでもいい。

黒マントの男

それはもったいない。ご自分への賛美は、素直に受けとったほうがよろしい。

クラウド

そんな忠告までするのか？　おれは人の話は聞かないことにしてるんだ。まじめに受けとりもしない。

黒マントの男
　でも、誰かおいででしょう。あなたの賛美者が、あなたを真摯に賛美する栄誉にあずかった者が、そしてあなたもその者からの賛美を、心から、よろこんで受け入れることのできる者が。

クラウド
　……知らない、あんなやつ。

黒マントの男
　それはそれは……。

クラウド
（逡巡するような間）……あんた、冥府だか地獄だかから来たなら、知らないかな、そいつのこと。会ったことがあるかもしれない。

黒マントの男
　では、もう死んでいるので？

クラウド
死んでない。死ぬわけないけど……でも……
黒マントの男
試しに、どんな人かおっしゃってみてください。
クラウド
どんな？　あの人のこと、どんなか云うのは難しい。
黒マントの男
でも、おっしゃっていただかなければ、わかりません。
クラウド
……そうだな……長い銀髪で……刀の刃みたいだなっていつも思ってた。冷たくて、長くて、つやっぽくて。とことん美形って感じだよ。いやみなくらい。おれもたいがいだって云われるけど、あいつもたいがいだ。本人に云ったことないけど。背が高くて、いい体してる。男らしくて……なんか陳腐だな、こんなふうに云うと。言葉って、だから嫌いだ。
黒マントの男

いえ、外見はだいたいわかりました。中身のほうはどうですか。

クラウド

……優しいよ。優しすぎるくらい。なんでも自分で抱えこめると思ってて、いい気になってやりすぎたんだ、きっと。云ってくれればよかったのに。おれの扱いはうまいくせに、自分の扱いはポンコツだった。バカだよ。バカなやつ。（うつむく）

黒マントの男

わかったような気がします。では、わたしが万が一、冥府でその男を見かけたとしましょう。なにかお伝えすることはありますか。

クラウド

あんた、あいつに会えるのか？

黒マントの男

もしかしたら。

クラウド

もし会えたら……もし、おれの云ってる男のこと見つけたら……

黒マントの男

必ずお伝えします。

クラウド

……こう伝えてくれ。バカ、自分勝手、くたばれ。それから、いつまでおれを待たせるんだ、調子に乗るな、とっととなんとかしろ。あと……あんたがいなくて寂しい。

黒マントの男

その男の名は？

クラウド

……セフィロス。

黒マントの男、ふいにぐっと立ち上がる。マントを脱ぎ捨てると、セフィロスがあらわれる。クラウド、瞠目する。

鋭い、動揺した間。

クラウド

……あんた、……

セフィロス

そういうわけで、冥府から戻ってきた。

クラウド

……あんた……ほんもの？

セフィロス

ほんもの？　にせものがいたか？　ああ、いたな（微笑む）。

クラウド

いたな？　いたどころの騒ぎじゃない。おれがそれにどれだけ……（かたくなに体を閉じて）おれは信じない。もう信じない。あんたなんか、絶対に。

セフィロス

目で見て信じられないのなら、触ってみるしかない。おまえの記憶の感触と、いまの感触とを、ふれあわせて確かめる……（腕を広げて、たとえようもなくなつかしく、いとおしむ声で）おいで、クラウド。

クラウド、はじかれたように腕を伸ばし、セフィロスの腕のなかに転がりこむ。おそるおそる見上げ、頬や髪に手を伸ばし、触れて確かめる。この行為には、あらゆる感情をこめるべきだが、時間をかけすぎてはいけない。

クラウド

……あんたの匂いがする。（うっとりと目を閉じて寄りかかる）

充足した、歓喜の間。クラウドが顔を上げてセフィロスを見つめ、目が合うと、永遠があらわれたかのような空間が広がる。合一と恍惚とを感じさせる瞬間。香り立ち、膨張して、聖なる気配が空間を隅々まで満たすように。ここでは、好きなだけ時間をとり、好きなだけ空間を拡張してよい。よろこびの気配が全身の隅々に行きわたるまで、次のせりふに移らないこと。

セフィロス

……悪かった。ずいぶん待たせたな。

クラウド
（セフィロスの胸に顔をうずめる）
甘く、やわらかく、染みわたる短い間。
クラウド
あんた、どうやって体、とりもどしたんだ。
セフィロス
とても頑張って。バラバラになったのを元通りにするのは、楽じゃなかった。しかも二度目だ。前回よりは勝手がわかって楽かと思ったが、そうもいかなかった。やはり人生はうまくいかないものだ。おかげでずいぶん苦労したが、まあ、済んだ話だ。
クラウド
……おれのために？
セフィロス
（目を細めて）おまえの生にあっては、起こるすべてはおまえのためのものだ。おま

えは祭壇の上にいて、すべての者が捧げものをしにやってくる。足下の死体を見ろ。おまえのために死んだ死体だ。その死がどれだけ幸福なものか、きっとおまえにはわかるまい。おまえはただ楽しめばいい。楽しんだろう、少しは。

クラウド
……よくある話だったよ。

セフィロス
（笑う）

クラウド
（セフィロスから急に体を離して）おれ、あんたに怒ってるんだった。

セフィロス
そうだろうな。

クラウド
おれはすごく怒ってる。

セフィロス
わかっている。

クラウド
怒りすぎて、死にそうなほど怒ってた。次に会ったら、今度こそ二度と存在できないくらい粉々にしようと思ってた……せっかく忘れたと思ったのに、あんた見たら、思いだしたじゃないか。腹が立ってきた。
セフィロス
どうもおれはおまえを怒らせるためにいるようだな。
クラウド
怒らせるなんてもんじゃない。あんたのせいだろ。あんたのせいで、おれはこんなとこで、ひとりぼっちで、亡主亡くして毎日喪に服してる奥さんみたいに、雰囲気まっくろけで暮らしてなきゃならなかった。おれの青春返せよ、この疫病神！
セフィロス
（よろこびに満ちて）ああ、どれだけこの悪口が聞きたかったか。
クラウド
（爆発して、椅子も含めて手当たりしだいにあたりのものを投げつけながら）みんなあんたのせいだぞ。死に神、ろくでなし、ウジ虫、こん畜生、ぬけぬけと戻って来や

がって、あんたなんかくたばりゃいい！

セフィロス

（感動し体をふるわせて）ああ！　それでこそおまえだ。

クラウド

うるさい、大嫌いだ、あんたなんか、あんたなんか……

ついに投げるものがなくなり、テーブルとその上の、コップに挿された花だけが残る。クラウド、たまらなくなって、セフィロスにむしゃぶりついてキスする。

クラウド

（キスしながら）地獄に送り返してやる……

セフィロス

（キスしながら）おまえが望むなら。

クラウド

（キスしながら）やだよ、あんた、勘違い野郎だから、ほんとにやりそうで怖い……

この万感の思いをこめた口づけは、セフィロスの長い銀髪に隠れて、観客には決して見えない。これはふたりのための間であり、完全にふたりのためのものでなければならない。観客を度外視し、ふたりの感情が満たされるまで続けなければならない。見せつけるためでも、観客が感傷的になるためでもなく、ふたりに必要な時間にあわせた間でなくてはならない。

クラウド
（唇を離し、急に甘えた声で）今日、おれのために三人死んだ。

セフィロス
（倒れている三人と血だまりを見下ろして）ああ、おれは誇らしい。

クラウド
みんなあんたが悪いんだ、あんたがおれのことほっとくから……でも、でも戻ってきてくれたからもういい。こうなったら、こいつらどころか、みんなそろってくたばりゃいいよ。こんな町、町ごと焼いてやりたい、ニブルみたいに。あんた、もっ

ぺんやる気ない？

セフィロス

ずいぶん皮肉の利いた提案だが、おまえが望むのなら。

詩人、ドアから入ってくる。セフィロスと、床に倒れている死体を見てぎょっとする。

詩人

ああ、間に合わなかった！　きっとこんなことになっていると思ったんだ……血のにおいだ、なんてひどいありさまだ……犠牲とは、こういう匂いのするものか……

クラウド

なんの用だ？

詩人

ああ、クラウドさん……いまのあなたの声はたとえようもなく甘い。それにとってもご機嫌で、満ち足りている……クラウドさん、あなたはいま、まったく見違えるよ

うですよ。ようやくお探しの人に巡りあったようですね……。

クラウド

なんの用だって訊いてる……

詩人

これは失礼しました。町の連中が、この騒ぎのことを聞きつけて、いまにも大挙してここへ押し寄せてきますよ！　あの陰険な商人め、みんなを煽りたてて……いまにあなたを捕まえに来ます。

金持ちの商人の声

（遠くから）こっちだ、こっちだ、血のにおいがするぞ！　きっとあの男の家に違いない、あいつは悪魔だ！

詩人

ほらね！　こうですよ！　低俗な連中の手にかかりゃ、美と聖とはいつも悪魔扱い。

セフィロス

察するところ、きみは詩人のようだが。

詩人

いかにもわたしは詩人です。

セフィロス

それでは、少なくともきみはこの子を賛美してくれたわけだ。礼を云おう。本来はおれの仕事なのだが、諸事情でしばらく果たせなかった。（クラウドを見つめて）それだけが気がかりだった。

詩人

（感激して）光栄です……あなたのような方の代理がつとまったとは、とても思えませんが。それにわたしだけではなく……いえ、わたしなんかより、真の賛美者は、そこに横たわっている鍛冶屋の見習いの青年です。彼は心からクラウドさんを愛してました……そのために死ぬほどに。

セフィロス

愛のための犠牲の死は最大の名誉だ。（テーブルの上の赤い花をとり、見習いの死体の上に置く）受け入れられない愛のための犠牲こそ。

クラウド

（セフィロスを見つめて）相変わらず、あんたってなに云ってるかわからない。でも

そういうとこ好きだよ。

詩人　（微笑んで）さあ、早く行ってください。あいつらにつかまったら、どんな目に遭うか。ここは、ぼくがなんとかしますから。

セフィロス　世話になったな。

クラウド　（セフィロスに手を引かれながら、満足げに死んだ三人を見下ろして）ばかなやつら。行こう、セフィロス。

セフィロスとクラウド、手をとりあい、出ていく。

詩人　……ああ、行ってしまった、クラウドさん……ぼくの詩、ぼくのうたよ！　きっともう永遠にさようならだ。でも永遠の別れやつらさの中から、おぞましい犠牲のなか

から、詩よ、おまえは生まれてくるのだものなあ！　血、血、美しいあの人のために流された血！　あのセフィロスさんという人は、真理を口にして出ていった。愛のための犠牲の死は最大の名誉、それも受け入れられない愛のための犠牲こそ……。

町の人たちが大挙して押し寄せてくる音。怒鳴り声、足音、興奮した声のおしゃべり、子どもの甲高い声など。

詩人

ああ、町の連中がやってくる。あいつらの手にかかれば、ほんものの悲劇も情熱も愛も、道徳だのくだらない倫理だののなかで、ただのゴシップにおとしめられてしまう……浅はかで愚かな連中め。だがぼくは詩人だぞ、きっとほんものの詩を、悲劇を書いて、この死者たちとクラウドさんに捧げてみせる。

ドアをノックする音。

詩人

情緒のないけだものども、詩人が死者に詩を捧げるあいだくらい待てないのか！あの人の美のなかで、ぼくたちは確かに幸福だった、この三人も、ぼくも……そしておまえたちは、美が必然的に要求する犠牲のうるわしい奉仕者となり、いまはこうして死んで横たわっている……おまえたちこそ勝利者だ。万歳！　安らかに眠れ！

暗転、幕。